

## ◇追憶

## 大槻伸次

間もなく「平成」という一つの時代が終わろうとしている。我々、昭和生まれ（一応戦前生まれ）人間としては、時代が一挙に歴史の彼方に遠ざかっていくようで一抹の寂しさを覚える。以前、昭和 30 年代初頭の暮らしを描いた「三丁目の夕日」という映画を観て、昭和という時代を懐かしみ懐古させてもらったが、私の心の中にはもう一つの昭和がある。それは自我に目覚めた頃の、強烈な恐怖（大戦末期）と貧しい暮らしを強いられた昭和 20 年代のことである。そこで私の頭の中にある微かな記憶を発掘し、生まれ育った古里の激動の昭和を追憶した。

私が生まれたのは、昭和 16 年 7 月であるから太平洋戦争の始まった年で、それから 4 年、日本は 2 発の核爆弾を投下され有史以来の大敗北で終わった。私自身、昭和 20 年は 4 歳になり昼夜を問わず空爆の中を逃げ回った記憶がある。私の生家はイオン太田店の南方 700m 位の所で、現在のイオン周辺は陸軍の高射砲陣地で、その南側（現在の国際学園）は中島飛行機の社宅が存在した。そんな関係で私が自我に目覚めた頃（昭和 20 年初頭の頃）は連日のように B29 という米軍爆撃機が飛来し（第一編隊、第二編隊と波状的にやってくる）、空爆に晒された。というのは、米軍機の第一編隊が中島飛行機工場を爆撃すると、その黒煙が北西の風に乗って我が家近くの上空に達した頃、米軍機の第二編隊がやって来て黒煙が棚引しているところが、中島飛行機の工場だろうと勘違いして爆撃されたと父らが云っていた。

高射砲陣地は、中島飛行機太田製作所の防衛の為だったようで、高射砲が一斉に火を噴くと我が家は 30 cm 位飛び上がるほどの衝撃があった。

戦中の就寝時は、空襲警報のポー（当時、我が家ではサイレンの事をポーと云った）が聞こえたら直ぐに逃げられるように、衣服を着たまま寝た。そして枕元には履物や防空頭巾を用意しいざ鎌倉状態だった。

或る時、北風の音にかき消されるように微かで物悲しい空襲警報のポーが鳴ったが、父母は昼間の疲れから全く気付かなかった。ところが、私と隣に寝ていた兄は気づいたので父にポーが鳴っているよと知らせると、父はおおそうかと慌てて飛び起き避難したことがあった。しかし当時は灯火管制されていた為、家の内外は漆黒の闇で、手探りで防空壕へもぐりこんだ。また、夕方の空襲時、父に促され防空壕から上空を見上げたら西陽にきらきら輝く複数の B29 の機影を見たことがあった。

昭和 20 年 2 月 10 日（寒い日だった）の空爆は、我が家の直近に焼夷弾が落下し、土の雨がザーザーと降って、母家（おもや）の片側の壁や建具は爆風で飛ばされ伽藍洞になった。その日、母は妹をおんぶし隣家のラジオ（我が家にラジオがなかった）で、空襲警報が発令されたのを知り慌てて防空壕に逃げ込もうと我が家に戻った。

そこで、風邪で寝ていた私を連れ出すため母屋に入って私を抱きかかえ、縁側から

飛び降りる瞬間被弾し、尻に破片の直撃を受け大きく尻肉を削ぎ取られるという重傷を負った（そのとき痛さはあまり感じなかったそうだ）。その瞬間母は、とうとうやられてしまったかと絶句したそうで、気が付くと「もんぺ」の裾から暖かい肉片がするすると落ちてきたので慌てて割烹着のポケットに入れて、近所の人に助けを求めた。

幸い高射砲陣地に駐留していた陸軍により、近くの天神山古墳に疎開していた中島飛行機の仮設病院に運ばれ、手当てを受けることができた。

後に、両親から聞いた話によると、病院までの道中は死体が転がっていた（この日太田駅周辺や女体山古墳近くのせいわ寮という社員寮に爆弾が命中し死者が多数出た）のと道路の破損で荷車（我が家にあった木製の運搬車）が動かず、軍隊が荷車を担いで連れて行ってくれたと聞いた。

私と兄は、祖父に連れられ（自身は祖父におんぶされ）空爆により燃える村を後にして本家に預けられた。その後、父が仮説の病院に母を見舞ったら息絶えだえそうな人達が多数いて、水をくれと云って父の服を引っ張ったという。その頃父にも赤紙（父は貧弱で甲種合格ならなかった）がきて、横須賀海兵団（入隊日、サーベルを下げた上官が群馬の者は居るかと言うから、恐る恐る手を上げ事情を話したらなんと親戚筋だった）に入隊したが、戦地に送られることなくその約半年後、終戦となった。

ところが、本家の従兄は、米国に打撃を与えてやると特攻隊（所沢）に志願したが、志半ばで終戦となり帰還し復学したが（旧制中学→新制高校に変わった）教育が180度変わった事に心の整理がつかず、奴は、暫らく虚脱状態だったと父から聞いた。

終戦から暫らくして太田に進駐軍が来ることを、親の会話からうすうす知ったが、怖い内容だった。というのは、進駐軍が来ると大人の男は●●を抜かれる、女はみんなアメリカ人の妾にさせられるなどと発していたからである。ところが、実際に進駐軍が来ても大きな異変は起こらなかった。しかし、米兵による女子への乱暴や、犯罪は数多く発生したらしいが、ほとんどは泣き寝入りだったようだ。

後に父からこんなことを聞いた。近所のIさん宅に真夜中若い米兵が忍び込み、奥さんの寝床に潜り込み乱暴をしようとしたそうだ。そこで驚き困り果てた奥さんは、今妊娠中だと身振り手振りでゼスチュアしたら乱暴せず帰ったという。

奥さんは近所の人達との茶飲み話に云ったそうだ。あのねー、あの晩旦那がきたかと思ったら様子がおかしいので灯りを点けたら米兵だったので腰が抜けるほどぶつたまげたと云っていたそうだ。また、或る日の夕刻、若い女性が追われて我が家に（生家）駆け込んできた。父はとっさの判断で娘さんを奥座敷にかくまった。娘さんを追っかけてきたのは米兵で、我が家に無断で入り込み、何やら早口の英語で捲し立てていたという。父は何を言っているのかさっぱり解らないので知らんふりしていたら、米兵は上がり鼻に居座って、長い間父と睨めっこになったそうだ。

暫らく我慢比べのような沈黙が続いたが、目の前の柱時計が午前零時を示し、ボンボンと鳴りだした途端のこと、米兵は何を考えたのか急に立ち上がり、大慌てで帰っていったという。後に、知人に話したらキャンプの門限に間に合わないと言った

議にかけられるから帰ったんだよと教えてくれたそうだ。

他に、夜中に自転車を盗まれたが、多分米兵の仕業だろうと翌朝近くのキャンプドルー（現スバル群馬製作所）に出向いたらキャンプゲートの近くに乗り捨ててあったという。しかし、我々子供たちは外国人など見たこともなかったので金髪や青い目にはすごく驚いたが、接してみると愛嬌を振りまいてくれたので大人たちのような怖さは感じなかった。

毎早朝、我家の前をハッハッ、ハッポーハ（行進中はずっと繰り返す）と聞こえる掛け声で、米兵の行進がやって来た。そこで、先輩からギブミーシガレット言えば、煙草を投げってくれるというので真似をしたら、キャメル印のタバコを数本投げってくれたので、父ちゃんの土産にしたら、すごくうまい「たばこ」だと喜んでくれた。当時、物資不足でタバコはさつま芋の葉っぱや桑の葉を乾燥して細く刻み、配給になったタバコ紙で専用の道具でくるくると巻いて作ったが、我々もやった思い出がある。

ある日のこと、我が家の前の砂利道をキャンプドルー方面に向かう米兵の行軍をポーッと眺めていたら館林方面から埃を高く舞い上げながら、木炭ガスで走る大型トラックが、喘ぎながらのろのろと近付いてきた。トラックの荷台には何やら重そうな荷物を満載していたようだが、我々のような背の小さい子どもでは荷台に何が積まれているのかさっぱりわからなかった。

行軍中の米兵は、トラックを遣り過ぎすため、行軍をストップし左端に寄った。すると背の高い米兵はなにやら奇妙なものが、積まれていると騒ぎ立てたようだ。すると一人の米兵が、ノロノロ走るトラックを追いかけてジャンプして荷台からそのものを引っ張り出した。何とそれは、米糠の付いたままの沢庵だったのである。沢庵はトラックの荷台にバラ積みされて運ばれていたのである。米糠の付いた異臭のする沢庵を見た米兵は、それが何であるかわからず皆で何やら捲し立てて騒いでいた。

ところが、沢庵を積んだトラックは、後方で何が起きているのもつゆ知らず、砂煙をもうもうと立てて市街方面へ走り去っていった。

戦後、空爆に怯えることのない生活が始まったが、農家であっても生活は貧しく食べるのが精一杯だった。というのは、長い間の戦争で田畑の手入れは行き渡らず荒れ放題、更に化学肥料がなかった為人糞尿ばかりだったので土地は痩せ細り、作物の収量は上がらなかった。馬は政府に供出してしまったので、全て満濃や鍬を使って人力で耕作するしかなかった。

また、雨が降ったりして田んぼに出られない時や夜なべは、むしろや俵を編んだり、縄をなったりと休む間がなく働いた。そこで両親は、朝は朝星、夜は夜星と言われる位、早朝から星が輝きだす晩まで田んぼに出ずっぱりで働いた。

腐敗していない人糞尿をたっぷりまいた田んぼに入ると肥しがせと云って皮膚が

ただだれすごく痒ゆかった。戦後、人糞尿を非農家から有料で汲み取って農家に販売し、生計を立てていた業者がいたが、我が家にも“ターメ”ひきませんかとセールスに来た。ところが、化学肥料がぼちぼち普及して需要が少なくなると、持って行き場がなくなって田んぼに必要以上にぶちまけたり、草むらなどに不法投棄するようになり糞害が発生した。

農家では、自家の人糞尿を使い続けるため畑の片隅に腐敗槽を埋めて黄金処理をしたが、時折、生状態のものを野菜にくれた為、回虫騒ぎに発展した。そこで、小学校では回虫の検査をする為、マッチ箱に糞を詰めて持ってくるように言われた。その結果、回虫卵の保持者はゲッターとするような不味い海草を煎じた虫下しを飲まされた。

人糞尿の腐敗槽の“タメ”は冬になると表面がカチカチに乾燥し北風に飛ばされてきた土砂が堆積する。すると、場所が判らなくなり、遊びに夢中になった子どもたちがよく墜落し糞だらけになった。

終戦後、ラジオは絶対必要ということになり大枚をはたいて買った。その日、父は唐草模様の大風呂敷にラジオを包んで大事に背中にしょってきた。ラジオが入ってから兄が知ったかぶりして云った。おめえなー、ラジオの中にはな小人がいて毎日歌ったり踊ったりしているんだぞと云った。自分は担がれているなんて思わなかったから納得してしまった。そこで、チャンスがあれば確かめようとその時を探った。

その日、家人が田んぼに出払ったので、椅子や座布団など積み上げて、ラジオに手をかけた。そしてラジオの後ろの板を外そうとしたが、中々外れなかったがひょいと外れた。ようやくラジオの中が見えたが、なんだかラッパのようなものとキラキラ光る電球のようなものが並んでいたが、小人らしきものは見えなかった。

そこで、手を突っ込んで確かめようとしたら激痛（250V 充電されている真空管の電極に触って感電した）が走り床の上に真っ逆さまに墜落し脳震盪を起こしたようだった。その後、兄にどうしたとたたかれて気がついた。兄に訳を話したらそれは嘘だと白状した。

私は、終戦から3年経過した昭和23年4月8日春爛漫の日（校内の桜並木の桜が満開だった）に小学校に入学した。しかし小学校に入学するといっても学生服やランドセルがあるわけではなく父と手ぶらで入学式に臨んだ。

そこで「石板と蠟石」や教科書が配布になったが入れるものがなく入学式の帰途、街でランドセルの代用品をくたびれるほど探しやっとの思いで探し当てたのが、旧日本軍の「背囊」だった。父はこれでいいと二つ返事で決めてしまった。

小学校に入学し授業が終わっても、我々上の子ども達は、学校で油を売ることなく帰宅するように言われた。というのは帰宅早々に弟妹達の子守をし、3時のお茶を田んぼに届け、ヤギの餌づくり（幼い子にヤギ乳与えるため飼育した）をして夕食の支度や風呂焚きなどあり遊ぶ間もなくやった（弟妹が次々と生まれ、8人家族になった）。

なかでも風呂焚きは一大事で、手押しポンプでバケツに水を汲み何杯も運んだ。焚きつけは薪で、薪割も当然やった。

後になって水汲みをもっと楽にやる方法がないかと兄と知恵を絞ったところ、屋敷の片隅に転がっていた桶を使えばいいんじゃないかとなり、繋ぎ合わせて試したところ、桶自体が錆びついていて穴が多かったので水漏れが多く実用にはならなかった。

家事の手伝いは二つ上の兄と共同でやることになっていたが、兄は要領がいいのでいつも力づくで押し付けられた。

或る時、父から発破をかけられた。おまえらな、俺がち（家）は食べていくのが精一杯なんだ！勉強はしなくてもいいとは言わないが、今は食うことが第一だから勉強は後回しでいいというようなことを云われた。そこで長男と次男である私は農繁期には堂々と学校を休んで百姓の手伝いをした（小学校は農繁休暇がなかった）。

ある時、作文の宿題が出たのでこれから作文を書かなければならないから田んぼに行けないと愚痴ったら、心配すんな！作文はな！俺が夜中におめえが書いたように、ちょこっと書いてやるから、とにかく田んぼに来いと云われ渋々了解した。

翌日、堂々と作文を学校に提出したところ、上手に書けていると先生に褒められ、作文はこういう風を書くのだと皆の前で読み上げられた。しかし、実際は自分で書いたものでないので自分としては嬉しいどころか穴の中に入りたい位恥ずかしくて冷や汗一杯だった。

こんな我が家のきびしい経営状態であった為、父の財布の紐は固く、近所の友達が映画の誘いに来てもいつも断っていたため、誘いも来なくなった。

昭和 25 年 6 月の或る日の晩のこと、暗い裸電球の明かりの下、家族で食卓を囲んでいたら NHK ラジオの放送が突然中断した。あれ！ラジオが故障（当時のラジオはよく故障した）かと一瞬ラジオの方を向いたら、突然、臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げますというアナウンサーの緊張した声が流れた。

家族は神妙な顔をして聞き入ったら、なんと朝鮮戦争（動乱）が始まったことを伝えるものだったのである。そこでお互い顔を見合わせ食事が一瞬中断し、父が深刻な顔をして「また戦争か」といって神妙な顔つきになったのが忘れられない。

その後、我が家近くの旧中島飛行機の社宅跡地（現在の国際学園）で、米軍の演習が始まってしばらく演習が続いた。親達が云うには朝鮮戦争が始まったのでその演習をしているのではないかと云っていた。その後、米軍が引き上げた後に、現地へ行ってみたら薬莢などの危険なものはなかったが、乾電池や壊れた計器などがごろごろ捨ててあったので拾ってきて磁石を取出し、古物商に売る為の鉄屑を探すのに利用した。

昭和 27 年 4 月 28 日、日本はサンフランシスコ講和条約に調印し独立を回復したが、太田の進駐軍の撤退はなかった。友達と街に出掛けた折、進駐軍のキャンプ地の中を堀の節穴から覗いたら、そこは一面濃緑の芝生で覆われ白亜の住宅が立ち並んで金髪

の子どもたちが遊んでいた。壁の向こうに不思議な世界をみた感じだった。

また、ここのキャンプ地でカーニバルが開かれたので父と出かけた。父は、払い下げの古い戦闘帽と軍服を着て、ゲートルを巻いて出かけた。カーニバルの会場（現在のスバル群馬製作所）をぶらぶら歩いていたら、飲料の売店が目にとまった。父はアルミの樽のような入れ物に入った飲み物に興味を示し、不思議な飲み物（樽には蛇口がついていた。多分、コーラだろう）をコップ一杯買って飲んだ。

そこで父曰く、奴ら（米兵）こんな薬の様な不味いものを飲んでいる、子どもじゃとっても飲めたものじゃないと云って全部飲んでしまった。自分は味見してみたかったのがっかりしたが、じたばたせずじっと我慢した。

薬の様な飲み物を飲んで、そのままこの場を去ればよかったのに、父ときたら米兵の前で、俺はな！帝国軍人だったと胸を張って揶揄った。そこで米兵は言葉が分かったのかわからなかったのか定かではなかったが、彼は神妙な顔で父を睨んでいた。

この頃の日本経済は朝鮮戦争特需で潤ったようだが、我々庶民まで潤いは届かず貧乏生活は続いた。巷では美空ひばりの歌謡がラジオから流れ、明るい話題も聞かれるようになった。

そして昭和 28 年、私は小学校の 6 年生になり江の島鎌倉方面の修学旅行に出かけた。この年、白黒テレビの放送が開始されたが、我が家に白黒テレビが入るのは 10 年待たなければならなかった。そこでプロレスの中継を見たいがため、テレビの入った近所の人に時化込んだ。